

Title	ポパー対コーンフォース：「開かれた社会」をめぐる友・敵関係
Sub Title	Popper versus Cornforth : Friends and Foes around the "Open society"
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1971
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.44, No.10 (1971. 10) ,p.18- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19711015-0018">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19711015-0018</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ポパー対コーンフォース

——「開かれた社会」をめぐる友・敵関係——

奈 良 和 重

## 序 言

- 一 「開かれた社会」——ポパーの場合
  - 二 「開かれた社会」——コーンフォースの場合
  - 三 *coincidentia oppositorum?*
- 結 語

## 序 言

モーリス・コーンフォースは、その著書『開かれた哲学と開かれた社会』のなかで、厚顔無恥にもこう述べている。「ポパー博士は、本文四八一頁に加えて註二〇一頁から成る『開かれた社会とその敵たち』に関する二巻本を書いた。しかしひとが、それらのうちに、いかにして開かれた社会へ向つて進むかについての、そしてまた、もろもろの個人が依然として大規模に苦しみ悶えつづけている物質的必要性、教育および機会の価値剥奪のいくばくをどうして除去するかについての知識

を探究するならば、『個人の責任』に関する漠然たるもののほか何も残されぬままに放置される<sup>(1)</sup>』と。これは、まことに的を射た批判であるということができよう。というのも、『個人の責任』問題こそ、カール・ポパーがつねに擁護してやまない思想的真意であるからだ。

コーンフォースの著述は一九六八年に公刊された。その副題に「カール・ポパー博士のマルクス主義についての反論への回答」とあるように、いわば「マルクス・ブルードン問題」にも比肩すべく、ポパー対コーンフォース論争を予期した人びとも少なからずいたことと思う。だが、その予期に反して、否！ そのとおりにと言うべきかも知れないが、『開かれた社会とその敵たち』<sup>(3)</sup>、『歴史主義の貧困』<sup>(4)</sup>の著者自身は、わたくしの知る限り、なんの音色も発しない。無論、反批判すべきは当のポパーを描いてないのだが、時は経過するまま、実はわたくしの最も初期の論文のひとつがポパーに関するものであったから——その後研究テーマにさまざまな変奏があつたが——、わたくし個人の立場からここに筆を執つたまでのことである。したがつて、以下の論稿は、コーンフォースのポパー批判を、主としてマルクス主義イデオロギーをめぐる論争の側面に限定し、カール・シュミットの有名な言葉を借りるならば、思想的な内戦状態にある開かれた社会の「友・敵関係」に照明を当ててみたい。そして、ポパーに代つて、コーンフォースに訊ね、こう問い返してみたい衝動に駆られる。細かい文字で埋められた(三九六頁恐らく分量的には二巻本に等しからうが)から成る味気ないこの本から、おびただしいポパーからの引用句とマルクス・エンゲルス・レーニンのステレオタイプ化した言葉の羅列を差し引いたとしたら、一体そこに何が残るといふのか、と。

(1) Maurice Cornforth, *The Open Philosophy and the Open Society: A Reply to Dr. Karl Popper's Refutations of Marxism*, London, Lawrence and Wishart, 1968, p. 328. (以下 O.O. と略記)

(2) 坂本慶一『マルクス主義とニートピア——初期マルクスとフランス社会主義——』(紀伊国屋書店第IV章参照)

(3) Karl R. Popper, *The Open Society and Its Enemies*, (revised and enlarged ed.) Vol. I, II, London, Routledge and Kegan Paul, 1952. (以下

O. S. I. II (略記)

- (4) Karl R. Popper, *The Poverty of Historicism*, London, Routledge and Kegan Paul, 1957. (以下 P. H. 略記)
- (5) 科学方法論あるいは科学哲学上の問題をめぐって、ポパーの優れた功績が最近わが国でも評価されつつある。コーンフォースとの論争についても、以上のような視角から、例えば、本多修郎「科学と弁証法——ポパーとコーンフォースの対立によせて」『未来』誌一九七〇年一・三月号がある。
- (6) 奈良和重「歴史の予測と社会的実践の科学性について」本誌第三十三卷第一号五四三—五六五頁。
- (7) C・シュミット『政治的なもの概念』田中 浩・原田武雄訳(未來社)

## 一 「開かれた社会」——ポパーの場合

ポパーの文章は鮮烈な、論争的アクセントの強いものだ。いつさいの衒奇性は筆りとられ、行論のあい間から何処となく洩れる鬱積など微塵もない。それゆえに、ある者の心を魅了するが、また他人の心を打ち碎き刎ねとばす。と言うのも、「……政治的思考および政治的本能は、理論的にも実践的にも、友・敵を区別する能力によつて実証される。重大な政治的クライマックスは同時に、敵が具体的な明瞭な敵として認識される時点なのである」<sup>(1)</sup> ということ、この事実をポパーはみずから厳しく実感しており、彼のおぞましい過去への回想が、偶然のはかなさではないからであろう。<sup>(2)</sup> 彼は、自己の基本的立場を明確に述べる。

新しい問題は、どちらが正しい信仰であり、どちらが邪しき信仰であるか、ということだ。わたくしが明証しようと努めてきたことは、われわれが直面させられている選択は、理性および人間一人一人への信仰と、人間の神秘的な能力——それによつて人間は集団性へと結合される——への信仰とのあいだのいずれかである、ということである。しかもこの選択は同時に、人類の統一性を確認する態度と、人びとを友と敵とに、主人と奴隷とに分ける態度とのいずれかなのである。

……《合理主義》と《非合理主義》という言葉を説明するため、これまで充分に述べてきた、とともに、合理主義のために決断をくだすわたくしの動機をはじめ、現在流行をきわめている非合理的かつ神秘的な認知主義のなかに、われわれの時代の巧緻な知的病いを認

める理由をも。それは、あまり深刻に受けとる必要もない病いであつて、皮相なものにしかすぎない……。しかしながら、その皮相性にもかかわらず、それは、社会・政治思想の領域においては影響力をもっているゆえに、危険な病いなのだ。(OS. II. pp. 246-247)

右の引用中の傍点はわたくし自身によるものだが、ポパーの思想内容と表現衝動をもの見事に示していると思われる。それは、迫害をうけた者のどよめきやまぬ反響に聞えるが、怨恨や挫折の狂おしさではけつして無い。人間の惨めさとか受動的な悲痛——それはポパーと無縁なものだ。彼は、あえて言えば情念と詩情とをこころの奥深くに抱きながら、己れの思想を現実に突きつけようとする。此岸の世界に生き、聖者たることを忌み嫌いつつ、眼眸は鋭く「開かれた社会」に見ひらかれている。ところで、この「開かれた社会」とは何か、そしてその敵とは誰なのか？ わたくしは先ず、すでに一種の日常語化し、あるいはメタファーのごとく使用されているこの言葉を、できる限り正確にポパーに則して、叙述しておきたい<sup>(3)</sup>と思う。

禁忌と慣習に縛られ、運命づけられた種族主義(Tribalism)、ポパーはそれを「閉ざされた社会」の主要な特徴と推定する。そこでは、社会生活のあらゆる側面が厳しく制約され、伝統的制度ないしは魔術の力の支配のもとに、いつさいは集団的責任に帰属させられている。こうした閉ざされた社会形態は、一種の生物学的有機体の概念に比較されよう。西欧文明圏においては、ギリシア初期の種族社会がそれに当るのだが、紀元前五世紀頃から、重大な激動と変化が生じたのである。<sup>(4)</sup>「われわれの西欧文明がギリシアから発祥するというとき、それが何を意味するかを、われわれは認識すべきである。それは、かの偉大な革命——それは依然としてその端初にあるように思われるのだが——、閉ざされた社会から開かれた社会への移行を、ギリシア人がわれわれに向つて開始した、ということの意味している」(OS. I. p. 175)とポパーは強調する。この革命のプロセスは漸次的に行われたわけで、意識的でも必然的でもなかつた。しかし、ポパーがまさに「偉大な世代」と呼ぶ

(O. S. I. p. 186) この時期を通じて、燦然たる光輝を放つアテナイ市民の自由と理性の理念が結晶化されつつあつた。

けれども、ポパーの見解にしたがえば、それは「文明の緊張が感じられはじめた」(O. S. I. p. 176) 時でもあつたのだ。いつの時代にせよ、移行段階にある場合そうであるように、人びとは、動揺常ならぬ現実のさなかで、もはや伝統的な制度とか、ましてや魔術的な憑霊に頼れず、むしろそれらを恐れることなく、個人の決断と責任において独立不羈の行動を余儀なくされるのである。この閉ざされた社会の壁を打破した原因は何であつたか？ ポパーはとりわけ、人口増加、海上貿易、商業の発達を挙げている。このことは、換言すれば、アテナイ帝国主義と、その植民地拡大化を含蓄しよう。誤解してはならないが、ポパーはアテナイ帝国主義を擁護しているのではなくて、逆にそれが種族主義的排他性に代置されていつた現象に着目している(O. S. I. p. 181)。それはまさに目をみはる、旺盛な発展であつたらう。しかし、当然のことながら、アテナイにおいても種族主義的残滓があり、伝統的な支配階層——彼らこそ種族社会の伝統の守護者にほかならなかつた——とデモスとの格闘はつづけられた。階級秩序が崩壊に瀕しているとき、寡頭制の執政官たちは、デモクラシーの逞しいエネルギーの影に怯えるようになる。また対外的には、アテナイの国政と種族社会の原型たるスパルタとの角逐抗争も日一日と激烈さを加えて行つた。デモクラシーの敵であるアテナイの執政官とスパルタとの淫らな奸計策謀が絡み合つて、ついに両者はたがい血の飛沫を浴びる破目になつた。ペロポネソス戦争がそれである。

アテナイ・デモクラシーの栄光とはいかなるものであつたらうか。ここでは、ポパーが引用しているペリクレスの言葉を記すことで充分であらう。(6) それは、今日のアテナイがどのような政治を理想として歩んできたかを明らかにし、戦没将士に捧げられた讃辞の一節である。

われわれの政体は他国の制度に追従するものではない。ひとの理想を追うのではなく、ひとをしてわが範に習わしめるものである。その名は、少数者の独占を排し多数者の公平を守ることを旨として、民主政治と呼ばれる。……われらはあくまでも自由に公につきす道をもち……自由な生活を享受している。苛酷な訓練ではなく自由の気風により、規律の強要によらず勇武の気質によつて、われらは生命を賭する危機をも肯んずるとすれば、はやここにわれらの利点がある。……また死地に陥るとも、つねに克己の苦悩を負うてきた敵勢にたいしていささかのひるみも見せぬ。……

われらは質朴のうちに美を愛し、柔弱に墮することなく知を愛する。われらは富を行動の礎とするが、いたずらに富を誇らない。また身の貧しさをみとめることを恥とはしないが、貧困を克服する努力を怠るのを深く恥じる。そしておのれの家計同様に国の計にもよく心もちい、おのれの生業に熟達をほげむかたわら、國政のすすむべき道に充分な判断をもつよう心得る。ただわれらのみは、公私兩域の活動に関与せぬものを閑を樂しむ人とは言わず、ただ無益な人間と見なす。そしてわれら市民自身、決議を求められれば判断を下しうることはもちろん、提議された問題を正しく理解することができ。理をかけた議論を行動の妨げとは考えず、行動に移るまえにことをわけて理解しないときこそかえつて失敗を招く、と考えているからだ。……

まとめよう、われらの国全体はギリシアが追うべき理想の顯現であり、われら一人一人の市民は、人生の広い諸活動に通曉し、自由人の品位を持ち、おのれの知性の円熟を期することができると思ふ。

なんと雄渾な言葉であることか！ だが、それらは、たんなる讚美や綱領にとどまらず、実に「偉大な世代の真実の精神」の表現であつて、さらに「プラトンへの直接的攻撃」として読まらるべきである(O.S.I. p. 187)。プラトンの叔父にあたりトリアコンタの老獪きわまるクリティアス、彼こそ「自由に對する、永遠の反抗」の指導者のひとりだ、とポパーは具体的に糾弾する。プラトンがクリティアスに追従したイデオログであつたのでは無論ない。彼自身こころの底から「暴虐政治」とテロリズムを憎んでいたのだから。しかし、開かれた社会への新しい途を拓こうとする画期的な努力に對して、プラトンは歴史的に逆行しようと試みたことは紛れもない。「プラトンの呪文」、ポパーは彼の偉大さをよく知つていたればこ

そ、あたかもそれを呪い返すかのごとく、パラドクシカルな批判の語気を烈しく吐きだす。一例を示そう。『開かれた社会』第六章の「全体主義的正義」には、こう述べられている。「プラトンの社会学を分析すれば、彼の政治綱領を提示することが容易になる。彼の基本的な要求は、二つの定式のいずれかによつて表現される。第一は変化についてのイデア論に照応し、第二は自然主義に照応するものだ。イデア論的定式とは、すべての政治的変化を止めよ、ということだ。変化は悪であり、静止は聖なるものである。……このことがいかにして実践可能であるかと訊ねられれば、われわれは自然主義的定式を以て応えることができる、自然へ帰れ、と」(O. S. I. p. 88 傍点はポパー)。

こうして、『開かれた社会』第一巻全体が、レンフォード・パンブローの述べているとおりに、<sup>(7)</sup>「プラトンの近代の友と敵」を混乱と誤解に導く結果を招いてしまった。だが、この痛烈な論争と闘争のなかで、誰がさざめ笑う勝利者なのか、誰がすすり泣く敗北者なのかは、ポパーにとつてなんら問題ではない。ともかく、プラトンは師表を裏切つたのだ。開かれた社会のために真に身を挺した殉死者を。われわれが人間理性への信仰を持たねばならないという教訓、と同時に、ロゴス嫌い(そして人間嫌い)、理論および理性への不信感、知恵を偶像と化するような魔術的態度、これらから身を護らねばならないという教訓を教えてくれた人は、ソクラテスであつた。アテナイ・デモクラシーに対する真の批判精神を具象化してみせ、まさにそのために死を選んだのは、ほかならぬ彼であつた。ソクラテスは教師である。けつして政治家ではなかつた。それゆえにこそ、彼の苦悶する冷静な魂には、現実の歪んだ醜悪がはつきりと浮彫りにされたことだろう。

ポパーはソクラテスを賞揚する。「デモクラシーに対する民主主義的批判と全体主義的批判とのあいだには根本的な差異が存在する。ソクラテスの批判精神は民主主義的なそれであり、実際に、デモクラシーの生命そのものであるような類のものだ」(O. S. I. p. 189 傍点は引用者)。皮肉な言い方だが、われわれがプラトンから学ぶべき教訓は、彼が説いたところと正反対のものである。個人主義、平等主義、目的としての個人人格、そしてなによりも知的な廉直さ(汝みずからを知れ)、



こうした人間主義に貫徹され、やがて全面開花する開かれた社会の諸特性への限りなき信条が、ソクラテスの教説の核心をなす。そして、これら人間的なものが、政治的問題として問題化した文明の緊張状況のなかに、われわれはソクラテスの悲劇を認めざるを得ない。

以上述べたように、ポパーの擁護する《真実の合理主義》とは、ソクラテスの合理主義にほかならない(O. S. II, p. 227)。そして、それを可能ならしめるような社会こそ開かれた社会なのだ。ところがそれと対照的に、人類の歴史は理性を放棄した非合理主義に支配され、情緒や情念が人類を友・敵関係に分け、犯罪的な殺戮を重ねてきた。われわれはふと理性からの迷いを生じるものなのか？ そうであるかも知れない。だが、ポパーの押しとどめようもない表現衝動は、逼真性を以ておのずとわれわれを説得する。統一、美、完全性への夢想、審美主義、全体論、集団主義、これらは種族主義の失われたる集団精神の徴候であるとともに、その所産でもある。それらは、文明の緊張に苦しみ、呻吟している人びとの表現であつて、彼らに熱烈に訴えかけ、まさに彼らの感情そのものでもある。われわれの生活の不完全さ——個人的にせよ、制度上にせよ——を痛ましく意識すればする程、憂愁の影は色濃く、改善への希いも空疎にひびこる。それにもかかわらず、ポパーは言う。「この意識こそ個人の責任の、人間であろうとする十字架を担う緊張をますのである。……だが、われわれが人間としてとどまろうと願うなら、ただひとつの途しかない、開かれた社会への途。われわれは、自由と安全への計画をするため、あらゆる限りの理性を用いて、未知なるもの、不確かなもの、不安定なものに向つて行かねばならない」(O. S. I, p. 201-202)。「開かれた社会とその敵たち」の章はかくして閉じられる。つづいて、本稿の目的であるポパーのマルクス主義批判に触れるべきだが、すでに述べたように、わたくしはそれについては前掲論文において論究したので、ここでは省略してただちにコーンフォースのポパー批判の問題に移りたい。

(1) シュミット、前掲書八四頁。

(2) ポパー自身一九三三年以来ナチに追放される身となり、ロンドンに亡命した。『歴史主義の貧困』の扉には、『歴史的運命の頑強なる法則に対するフアンスト、およびコミュニストの信仰の犠牲となつて倒れた、すべての信衆、国民、民族の数知れぬ男女のために捧ぐ』と誌されている(奈良和重、前掲論文、五四九頁参照)。

(3) ちなみに、コーンフォースの書の最終章は、ポパーの標題そのままであつて、友・敵関係の価値、内容転換が行われていることに注意しておく。

(4) ここでポパーが意図しているところは、ギリシア古代史の正確な文献学的考証や記述ではない。史料の緻密な研究は、古典学者の専攻なのであつて、ポパーは、彼らの反論にかかわつてはいない。彼の歴史解釈に関する論点は、第二巻の終りに明瞭に述べられている(O.S.II, chap. 25, Has History Any Meaning?)。それにせよ、歴史学は一般化科学とは異なり、あくまで特殊な解釈にしかすぎず、ポパー自身の言葉によれば、ひとつの観点 (a point of view) にはかならぬ(O.S.I, p. 171)。

(5) スバルタの基本的政策を、ポパーはつぎの六項目に要約している。(一) 静止した種族主義の保護、(二) 反人間主義(平等主義的・民主主義的諸思想の遮断)、(三) 経済的自給自足、(四) 反普遍主義あるいは個別主義、(五) 征服支配、(六) 不拡大化。以上のうち、現代全体主義の諸傾向と類似してみれば、最後の項目を除いて、歴然たるものが認められよう。勿論、ポパーは、これらを同一視しているわけではなく、現代全体主義は帝国主義的傾向を有することを見逃してはならぬ(O.S.I, p. 182)。

(6) ここでは、シムエットの英訳が使用されている(O.S. I, pp. 186-187)。その冒頭部分は、'Our city is thrown open to the world; we never expel foreigners……'となつており、開かれた社会の特性を顕示するにはより適切であると思われる。しかし、われわれは邦訳にしたがつて引用する。トウキョウディデス『戦史』久保正彰訳(中央公論社)世界の名著第五巻所収、三五六―三五九頁。

(7) Ranford Bamrough, "Plato's Modern Friends and Enemies" in Ranford Bamrough (ed.) *Plato, Popper, and Politics: Some Contributions to a Modern Controversy*, Cambridge, W. Heffer and Sons, 1967, pp. 3-19.

## 一一 「開かれた社会」——コーンフォースの場合

コーンフォースは自分がマルクス主義者たる理由をこう述べる。

わたくしは、すべての立場が不断の検証にしたがい、それに照らして修正され、あるいは必要とあれば破棄されるべきだ、ということについてはポパーに全面的に賛成する。だが、それにもかかわらず、わたくしがマルクス主義者としてとどまつているのは、マルクス

主義をこの批判的原理から除外しているからではなく、わたくしは《批判的》態度というものを、すべての《批判者》に対し敬意を払ってこころ易くぬかづくものとは解釈していかないからだ。わたくしとしては、マルクス主義に反論するどのような論理的あるいは科学的議論もいまだに見出してはいないゆえに、マルクス主義者なのである。もつとも、マルクス主義の発展に貢献しているものも多々あることだが、しかもなおわたくしは、マルクス主義に反論しようとする議論は、論理的でも科学的でもないことをつねに認めている。(O.O. p.37. 傍点はコーンフォース)。

右に《論理的》とか《科学的》という言葉が用いられている場合、必ずしも明確でなく、むしろ両義的な恣意性を疑いたくもなるが、コーンフォースは弁証法論理、あるいは史的唯物論を念頭に置いている。そして、それらは、伝統的な形式論理の矛盾律とも、自然科学のいわゆる科学概念とも和解しがたく、それこそ友・敵関係にあることは周知のとおりである。しかしながら、コーンフォースが、ポパーはマルクス主義の科学方法論を無視していると非難するとき、彼は弁証法的唯物論、ないしは史的唯物論というものを「マルクス主義の哲学」ではなく、むしろ「科学以外の何ものでもない」(O.O. p.40)と主張している点は注目に値しよう。<sup>(1)</sup>しかるに、ポパーはマルクス主義を、あたかもヘーゲル流の「強化された独断論」(a reinforced dogmatism)<sup>(2)</sup>であるかのように(O.S. II, p.40)「みずからそれを強化させているではないか(O.O. p.88ff.)」。「開かれた哲学」者にとつてみれば、まことにいわれなき異議申し立てというわけである。「まえがき」に、本書はポパーに対する論争ではなく、ポパーのマルクス主義に対する論争への答えなのだ、とコーンフォースが断っているのは真実を物語っている。では、彼のいう「開かれた哲学」は何を求め、何を解決しようとするものか。マルクス主義者として、問題の解決など度外視しているのであるが、この溢れるばかりの才能のうち、繰り返される蔑視と痼疾のほか、われわれには目新しい何ものも見当らない。マルクス主義の《論理》《科学》問題については次節に譲り、ここではその「開かれた社会」に眼を注いでみよう。閉ざされた社会と開かれた社会という対比は、「資本主義から共産主義へ」の歴史的移行に変わつてい

ることは一目瞭然だ。その姿の変装には、それに相応しい思想的衣裳をまといながら……。

コーンフォースはつぎのように論じる、「……資本主義のもとで獲得した社会的諸関係は、種族主義あるいは原始共産制のもとで初めに獲得したところのもの完全な否定である。種族的秩序から遠去りながら、社会的形成は、その行きつくかぎり、その直接的なアンティテーゼにまで行きついた。人間の社会的発展において、資本主義は、種族主義から最も遠く隔つたところにたえず、いる。」(O. O. p. 333 傍点はコーンフォース)と。先ず、種族主義と原始共産制との同一化、この点についての認識にポパーとの大きな相違を気づくだろう。したがって、コーンフォースは、種族主義的社会から開かれた社会への途に、「偉大な世代」といつたような曖昧なイメージ設定を、あるいはその欺瞞性を曝く。つまり、種族主義を引き継いだ《開かれた》社会とは、実は階級分裂化した社会である、と。そして、マルクスが明瞭に証明しているように、その移行原因となつたものは社会的生産力の発展、労働の分業、私的所有制にほかならない。したがって、「開かれた社会への途」についてのポパーの叙述のうちに、われわれは恐らく、ある種の曖昧性を、大言壮語と無意味さとの結合をすら探りえよう」(O. O. p. 327)。さらに語をついで、「ポパーは《閉ざされた社会》と種族主義とを同一化しているからこそ、資本主義のもとで獲得したアンティテーゼの諸条件のうちに、《開かれた社会》の実現化を認めるのもごく自然のことだ。彼にとつて実際に、《開かれた社会》とは資本主義の別名にすぎない」(O. O. p. 333)と。

確かに、資本主義とは、正統派マルクス主義の教条的見解にしたがえば、閉ざされた社会の別名にすぎないだろう。しかも、コーンフォースがわざわざ斜体で書いているように、開かれた社会の真のイデオロギーの敵は、《アンティ・コミュニズム》という表現のもとに含まれる一切のものである(O. O. p. 374)。マルクスの『資本論』の歴史的・現実的基盤——資本主義社会は、少数ブルジョワジーと圧倒的多数のプロレタリアートがたがいに階級敵として闘争する場である。彼らは、経済的には搾取・被搾取の、政治的には支配・被支配の権力関係に置かれている。マルクスが問い、かつ分析した当の問題

は、一体何であつたのか？ 資本主義の形成と崩壊のプロセス、彼はそこに「頑迷な必然性をもつて作用し自己を貫徹しつつある傾向」<sup>(3)</sup>をはつきりと確認した。この嚴肅な事実を認識するということは、ポパーの言うような「臆説」(conjecture)どころではけつしてない(O. O. p. 82)。コーンフォースは強調する。「社会的諸関係は変化し發展する。その変化と發展がいかにしてもたらされるか、そしてそれを支配している諸法則の問題、つまり、社会とその歴史の科学的理解の主要な問題こそ、社会的諸関係の相互依存性を分析し類別する問題なのである。社会とその發展を支配している諸法則は、かかる相互依存性の一般化された命題として表現される」(O. O. p. 167)。

以上明らかのように、コーンフォースの資本主義社会に閉ざされた社会とする等価的理解——ポパーに対する理解の不充分さのゆえに、「開かれた社会のための闘争」における友・敵関係が倒錯、あるいは顛倒した姿態を呈してくる。「……これは開かれた社会とその敵たちについてポパーが述べるところと正反対である。資本主義が、搾取、もろもろの階級、階級闘争が消滅しつつあるという風に、基本的には最近変化を遂げたのだと信じて、彼は、資本主義がそれ自体開かれた社会であると言う。だから、開かれた社会の友——彼らは資本主義を回避しようとして組織しつつある——がその敵だというのだ。そして、開かれた社会の敵——彼らは資本主義を保存しようとして組織しつつある——がその友なのである」(O. O. p. 373)。こうした立脚点からすれば、いわば「マルクス主義とその敵たち」ということにもなるだろう。

他方で、共産主義に開かれた社会はユートピアではない、という。なぜなら、それこそ生産諸関係と社会的生産物の配分方法とが、現代の科学的・技術的革命によつて創りだされた生産諸力に適應されるようになった社会であるから(O. O. p. 354)。だが、それはテクノロジーの導入によつてのみ解決されるものではなく、持続的な政治闘争、しかも労働者階級の集団的責任(O. O. p. 339)において勝ちとられ、また勝ちとらるべきものである。この共産主義への途は「実践的に可能であるばかりでなく、必然的である」(O. O. p. 357 傍点)はコーンフォースがゆえに、「マルクス主義者たちが労働者階級運動に与える忠

告は、民主主義的諸権利のために闘い、そして、これら諸権利に対するあらゆる攻撃や制限に抗して闘うため、民主的に組織化することであり、またつねにそうであつた」(O. O. p. 288)。資本主義社会においては、労働者階級はアクティヴに闘わずしては、みずからの利益をならん得ることができない。マルクスが宣言しているように、「労働者革命の第一歩は、プロレタリアートを支配階級にひき上げることと、デモクラシーを闘いとることである」<sup>(4)</sup>からだ。

コンフォース自身は、制度としてのデモクラシーを否認しているわけではないが、ポパーが執拗に説く制度論的デモクラシー(O. S. II, pp. 160-161)には、階級関係がまったく欠落している点を鋭く突く。デモクラシーを闘いとるために、彼は、支配階級の暴力に対して、人民大衆組織を提示する。また、支配階級の特権を保護するような法に反対する。そして、資本主義を絶滅させ、共産主義への途に前進する大衆組織による政治権力のコントロールを提示する(O. O. p. 303)。と同時に、ポパーのいう「漸進的社会工学」(P. H. p. 45; O. S. I, p. 159)こそ「資本と労働の階級闘争の特殊現代的な顕現にすぎない」(O. O. p. 228)として反対する。コンフォースによれば、社会工学といった概念自体が、革命ではなく改革であり、デモクラシー的制度内部の馴れ合った幻想だからである。すなわち、「ポパーがわれわれに《社会工学》について講述するとき、彼は明らかにマネジメントの制度にかかわっているのだ」(O. O. p. 245)傍点はコンフォースと。そしてそこには、必ずや虚偽の権威と権力とがつきまとうものである。

ついで、ポパーのいわゆる歴史主義に内包される全体論とユートピア主義、それゆえ彼が厳しく批判した「空想的社会工学」(P. H. p. 67; O. S. I, p. 157)に関して<sup>(6)</sup>は、いささか逆説めいた表現だが、コンフォースはこう述べて破顔一笑しているようだ。「共産主義社会の指導原理は……彼岸的理想とはならず、高度に自動機械化された生産システムのもろもろの利用に、人間諸関係を適応させるためにどう組み入れねばならないか、という諸命題なのである。そのようなシステムを建設することは、ユートピア建設の問題ではなく、工学の問題である」(O. O. p. 352)。事実、「全体論的プラン」という側面だけを

取り上げるならば、今日の時点——コンピューターとオートメーションの時代——においてはじめて可能となつたといえようし、それが人間の理性や自由の批判精神の圧殺となるというのは杞憂のごとくに思われるかも知れない。<sup>(7)</sup>ともあれ、開かれた哲学者は、さかしくも『ゴータ綱領批判』の有名な一節「各人はその能力に応じて働き、各人はその必要に応じて与えられる<sup>(8)</sup>」を引くことを忘れない(O.O. p.353)。

共産主義という名の開かれた社会では、商品生産はもとよりのこと、労賃も分業もやがては消滅するはずである。その移行過程は、漸進的にソヴェトの現実のなかで工学化されつつあるという。コーンフォースの言葉を読みつづける忍苦に耐えられれば、つぎの冗長な引用を許していただきたい。

社会的福祉のための社会主義的計画化は、そのうちで計画が作成され、実行されるひじょうに精密な制度的枠組の建設が要求される。これは勿論、命令を発する単独な《全体論的プランナー》についてのポバーの《すばらしい新世界》的な幻影とは似ても似つかぬものだ。研究と教育の諸制度が要求されるし、数学的技術を使用する《厳密科学》として、計画化の理論を編みだしてゆく。中央と地方との計画の相互連関した諸制度が要求され、それらは公共諸組織、労働組合、労務管理等と密接に協議し合つて進められる。そして、これら諸制度は、その計画を実行する生産諸制度（工場、農場、鉄道、地方自治体など）と関連して、計画実行を監督し検査することが要求される。ソ連で現に行われているように、そのような制度的枠組が計画化のために建設されるときに、専門的管理機構は民主的コントロールと両立したいものではない、といった觀念が資本主義的イデオロギーの最近の幻想のひとつにはかならないことが歴然としてくる。というのは、以上のような枠組中では、一方において専門知識——高度の訓練を受けた技術者たちを使用する専門的仕事に諸計画を委ねること——と、他方では民主的コントロールとが結合されているからである(O.O. p. 367)。

ソヴェトが開かれた社会のひとつの現実的モデルであるかどうか、今それに異議を唱えることが問題なのではない。コーンフォースの書の最後の節「理性への合理主義的信仰」、それも終り近くになつて、われわれは真実らしい言葉に出会う。

彼にとつて、ポパーこそ「閉ざされた社会」を固定化させている敵であることに变りないのだが、資本主義社会における階級対立、あるいは階級利害はたとえ現存しているにしても、それらは、ポパーの理性的であること (Reasonableness)、「批判的議論に耳を傾け、経験から学ぶどころ構え」を排除するわけではない。このことは、ポパーのいう「社会工学」についても、さらに一層理論的な諸問題——哲学、道徳、美学など——数多くの問題の討議についても同様である、といわれている。ところが、こと人間関係、社会発展、より実践的には、生産管理、国家権力の統制、政策形成などに到ると、以上のごとき態度は終息してしまふ。したがつて、「現状を終焉させるためにわれわれが持たねばならぬ理性にかなつたイデオロギーは、諸制度がわれわれによつてどのように変更されねばならないか、支配者や政策がどのように統制のもとに置かれねばならないかを示すために、それらを合理的批判にしたがわせるものである。……」(O. O. p. 389)といわれると、かえつてわれわれはポパーとコーンフォースとの一致と反対を鮮かに見せつけられる想いである。coincidentia oppositorumとでも言うのだろうか、次節ではこの微妙な問題に触れてみたい。

- (1) コーンフォースは、マルクスが人間および人間社会に深い洞察力をもつていたこと、そしてそれらの科学的理解を追求したことを評価する。だが、それはヒューマンニズム的なものの理解から隔たること程遠い。したがつて、コーンフォースは最近流行の初期マルクス研究には一言も触れていない。この点は、ポパーについても同様であつて、彼はマルクスの「人間主義的衝動」に一点の疑いも抱いていないが (O. S. II, p. 85) マルクス主義とヒューマンニズムの問題には関知してない。両者とも『経済学・哲学手稿』に言及していないことがその証左である。
- (2) この言葉を、コーンフォースは Karl R. Popper, *Conjectures and Refutations*, London, Routledge and Kegan Paul, 1963, p. 334 から引用している。すなわち、「弁証法によれば……マルクス主義は、弁証法的方法を用いることによつて、どんな立ち入った攻撃をもかわずに充分な弾力性をもつた独断論として、自己自身を確立する。だからそれは、わたくしが強化された独断論と呼んだものになる」と。
- (3) 言うまでもなく、この言葉は、マルクス『資本論』長谷部文雄訳 (青木文庫) 序言にあるものである。
- (4) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』相原茂訳 マルクス・エンゲルス選集 (新潮社) 第五卷 二頁。
- (5) 同様にして、コーンフォースは、いわゆる「ブルジョワ・リベラリズム」に同意しないにしても、制約からの、自由を標榜するリベラリズムそのものを否認しているわけではない (O. O. p. 365)。



(6) 奈良和重、前掲論文、五六〇頁参照。

(7) ポパーの憂いの影が、まさにこのところに落ちていたことは明らかである。「われわれの主要な論点はきわめて簡単なことだ。つまり、われわれ自身身犯した誤りを批判することは、たいへんに困難だ。しかも、多数の人びとの生命をまきそえにするような行動の誤りに対して、批判的態度を持ちつづけることは、われわれにとつて殆んど不可能に近い。換言すれば、ひじょうに大きな誤りから学ぶことは、ひじょうにむづかしいのだ」(P. H. p. 288)と。

(8) マルクス『ゴータ綱領批判』佐藤進訳 同選集第九卷一四六頁。

## 二 coincidentia oppositorum ?

「……真のマルクスは、ポパーが彼を混乱させる意図を以て宣言する当の科学の方法と、さまざまな科学的真理とにまこと交友的である。そして、真のマルクスこそ、真に科学的な外見の装いにもかかわらず、ポパーがただ誤つて説き、回避している当の科学的結論を抽きだした。科学的方法および科学的結論の性格についての誤解が発見されるべきなら、それはまさに、ポパーのマルクス主義に含まれた誤説と回避とのなかにある。マルクスに関しては、彼は徹底的に科学的な仕方、社会現象の研究と社会的治療への提言にアプローチした」(O. O. p. 163)。

真のマルクスとは何か、科学的方法とは何か、ふたたびわれわれはコンフォースに眩惑されがちだが、視角を変えてノーマルに事物を眺めて、ともかくも彼を自己満足の領域からひきずり出したい。たがいにほとぼる熱い憤怒——それはおよそ思想家を取り扱う際のこころ構えではない。ヒステリックな冷笑や空しい罵言、それこそポパーへの誤解を招き、みずから「科学性」を誇示する者が自己を問いつめ、試めさせる機会を逸してしまふだろう。コンフォース自身をして語らしめるのが賢明である。所詮イデオロギーの対立というものは、離れ去れば去るほどに、深さをまして次第に自己埋没してゆくものなのだ、いつかは己れの存在理由を無化するまで。

コンフォースは、理論の科学性の準拠として、ポパーのいう「反証可能性」(falsifiability)と「検証可能性」(testability)

とを、ともに認めている(O. O. p. 19)。しかも、なによりも先ず、独断を克服する合理性とは、討論と事実探究によつてテストされること——ポパーの表現にしたがえば、「科学的方法の共同主観性(Inter-subjectivity)」(O. S. II. p. 217)<sup>(1)</sup>——を重視する。その限りでは、ポパーの科学概念に批判的でありつつも(O. O. pp. 139-140)、マルクス主義も検証可能であり、反証可能であり、かつ修正可能でなければならないことが容認されているかにみえる。そしてコンフォース自身が「マルクス主義は、マルクス主義自体の基礎原理に対してさえも、独断的な無批判的態度をとると主張する根拠は、確かに無い」(O. O. p. 112)と述べるとき、そこに一点の疑念もない誠実さがあるかどうかをテストするなら別だが、ともかく言葉の無益な遊戯とは受けとれない。とすると、ポパーとの方法的接近度はどの位であるのか、と訊ねたくもなろう。

すでにみたように、コンフォースは、マルクス主義が哲学ではなく、科学であることを力説していた。この点を再度確認しておく、<sup>(2)</sup>「弁証法的唯物論は、《宇宙の本質は何であるか》という問題に答えを述べようとしな<sup>(1)</sup>い。それゆえそれは、《事物の全体性》、《あらゆるもの》、《総体としての世界》、《事物の究極的な実体》、あるいは《現実性の究極的構造》についてのどんな一揃いの命題からも成り立っていない。弁証法的唯物論が、こうした種類の問題にある解答を提示する《形而上学体系》の類いだ、と仮定されたならば、それは端初から誤解され、誤説される。論理学や科学的方法に関する現代の諸研究が結論的に明示しているとおり、それらはすべて間違つて定式化された問題である云々……」と指摘しつつ、<sup>(2)</sup>《総体としての宇宙》に関する壮重なる諸理論は、実践に移せず、かえつてそれを惑わすのみで、いかなる実践的検証にしたがわせることも不可能だ。実践に移すためには、われわれは、実践的にわれわれにかかわりあう当のものに関する検証可能な理論を欲している(ちようどポパーみずからが主張しているように)。(O. O. 38 and p. 39 傍点はコンフォース、ただ最後の括弧内の部分は引用者によるもの)と。

だが他の箇所において、マルクスは《総体としての社会の発展》に関心を抱いていたのであり、それは生物学者が有機体

の発展に関心を抱く場合と同じである、といわれる。たとえそうであるとしても、マルクス主義者(生物学者も同様に)を《全体論者》とする理由とはならない。「いずれも《諸側面》を排斥して、《総体》に関心を抱いているわけではない。いずれも、《総体》が部分の錯綜した相互作用の所産であることを、充分よく知っているからである」(O. O. p. 160)。マルクスが資本主義を《総体》として把握したこと、それは奇異なことではない。むしろ奇異なのは、コーンフォースが部分と全体との「フィド・バック」のメカニズム」といつた表現を用いながら、階級闘争の必然性と歴史の全体状況の認識を結びつけていることである。われわれにはポバールの明晰な問いの方が余程分り易い。「人間と社会の諸関係、これらの二つの側面のいずれがより重要なのか? いずれが強調するべきであるのか?」(O. S. II, p. 209)。

ここで興味があるのは、コーンフォースがポバールを自分に引き寄せながら全体論的哲学の要求を拒否する一方、翻つてマルクス主義の全体論を容認していることだ。さらに彼は、マルクスの『経済学批判』序言を援用しつつ、唯物史観は、過去についての記述的・説明的なものであるとともに、現在についての処方的な指導理念を授けるものである、と意味深げに述べる。現在の歴史的問題を研究し、人間のあらゆるもの要求を満すために社会的諸関係をどう発展させるのが最善か、それを決定するのがまさに「共産主義的理論と実践である」(O. O. p. 138)というわけなのだ。マルクス主義者ならずとも、かかる問いに真摯な努力を傾注しない者がいるだろうか? いつさいの現実問題から身をひく異形のペガサスは別にして。そこで問題はやはり、開かれた社会のための闘いが、歴史主義的發展法則の理論的基礎によつて正当化されるか、否かという起点に戻つてしまふ。

コーンフォースは、ポバールが無条件的予言と長期的予測を混同しているという理由から——ポバールは一度たりとそうしていない——、マルクス主義は歴史主義的でないことを証明する。『歴史主義の貧困』のなかで、明らかにかの「フォイエルバッハ・テーゼ」のひとつを振つて擲擻している箇所<sup>(3)</sup>、「歴史主義者はさまざまに社会発展を解釈し、それを援けることが

できる。だが、肝要なことは、誰もそれを変革することができないということだ」を読めば、恐らくコンフォースは激怒するに違いない。それに対して彼は、予測Ⅱ確率Ⅱ主体的意図という脈絡で、マルクスの真意をとらえ直そうとする。その論理を誤りなく伝えるために、つぎの要約的な文章を引用しておく。

第一に〔マルクス主義の〕予測は、社会発展の一般法則——生産関係は生産力に対応される——の認識のうえに基礎づけられている。第二に予測は、資本主義的生産関係の事実研究と、それらがどのようにして生産力の桎梏となるか、に基礎づけられている。第三に予測は、近代の産業において発展させられた種類の、社会化された生産は社会的充当を要求する、という証明に基礎づけられている——それゆえに、社会的必要性に見合った近代の社会化された生産を發展させる唯一の途は、社会主義的生産関係を確立することである。第四に予測は、資本主義的生産関係（そこにおいては、社会主義を実現しようとする意図が、大多数の労働大衆の階級利害と照応している）の結果から生じる階級闘争の分析に基礎づけられている——それゆえに、長期的にみれば、そうした意図によつて行動化された諸勢力が、社会主義に反対を唱える人たちに比較して、はるかに強力となつてゆくだろう。第五に予測は、社会主義のための戦略・戦術に関するもろもの原理から、きわめて実践的に創出されたものに基礎づけられている（O. O. p. 148）。

以上五項目はどれひとつとして、マルクス主義的教義を逸脱してはいない。他方においてコンフォースは、歴史的予測というものを厳密な決定論的意味に解釈することを強く誡め、ポパーの言葉をまじえた奇態な文体を以て答える。「われわれはまた、事物がいかにして起るかについての概念を、事実がいかにして起つたかについての記録を検討することによつて検証する——そして、《反論》は、未来に待ち受けていると同じく、容易に過去にも探られるだろう。以上の理由からしてわれわれは、科学的諸概念は、すでに生じたところのものによつてかなり確実に定められる、といつても主張できるのである。いかなる時に反証をあげられるやもしれぬ未来についてのたんなる《臆説》であると、ポパーがそれらをごとごとく見なすことに別段加わらずとも」（O. O. pp. 139-140）。これはどう受けとつたらよいのか、判断に迷う。確かなことは、少なく

ともポパーのように、理論をあくまでも作業仮説 (a working hypothesis) として提示する態度 (O. S. II, p. 260) は、何処にも明白に見られないということだ。とすると、コンフォースには典型的な歴史主義者の烙印を押されねばならない。なぜなら、彼にとつて歴史的予測は、たんにわれわれの科学的概念を検証することが目的ではなく、まさに行動に方向づけを与えるものである。その場合に、反証不可能性、とでもいべきものが、彼の敵の語りかけを拒んでしまう。結局、逸脱はつねに誤りなのである。

翻つてコンフォースは、ベーコンの命題を意識してかどうかはともかく、「すべての知識は力である。その結果、われわれ自身の諸活動についての知識が、われわれの社会的諸活動の性格における変化を可能ならしめることとなる。知識を充分に持ち、それを使用する組織を樹立したとき、われわれは、みずからの環境と諸要求に関する知識に、われわれの意図を基礎づかせ、それを実践してゆくことができる」(O. p. 171)と書いている。意図＝行動という等式は、かりに歴史的予測の科学性に裏付けられているからといつて、その意図に反した諸結果をもたらすかも知れない。この点で、マルクス主義の思想的洗礼を受けた者の倨傲は、実践において神のように閃く。われわれは右の言葉に逢着すると、戦慄を覚えないだろうか。前節で示したように、それらが共産主義への移行のプログラムとして現実の日程にのぼつているといわれ、つとにマルクスは、人間的諸要求を満足させる「豊かさ」を生産しうる、近代技術の経済的事実というものはつきり認識していた (O. O. p. 383) といわれるとき、一体どのような感銘に打たれると思つているのだろう。まったく異つた理由にせよ、正反対の原理に基づいているにもせよ、「マルクスの信仰は、基本的には、開かれた社会への信仰であつた、とわたくしは信じる」(O. S. II, p. 200) とポパーがわれわれに語りかける言葉の方が、ひたむきな人間性の余韻を伝えてあまりある。繰り返しになるが、ポパーの漸進的社會工学の発想は、われわれの科学的知識の実践可能性をめぐる合理的批判とその評量にかかつていた。そして、その決断自体は、科学ではなく倫理の問題であつたことを言い添えておく。

このところで必然的に、かのスターリン主義の恐ろしい重圧が、切実にわれわれの胸に迫ってくることであろう。ポパーは、それと明瞭にスターリンの名を一言もあげていないが、<sup>(4)</sup>「強化された独断論」にこめられた内実によつて、それは察しられよう。当のコンフォースは勿論、「スターリンのもとで起つた権力濫用」(O. O. P. 376)をたんなる不可避的な悪として葬り去つてはいない。「共産主義者やマルクス主義者は、かつて起つた悪に対して申し開きをしようとはしない。マルクス主義理論の歪曲、経済的管理の誤り、官僚的残酷さ、統治方法……における放縱と犯罪が行われた」(O. O. P. 188)<sup>(5)</sup>。だが、直接スターリン主義とは関係ないが、さりげなくつぎのようにも述べられている。「過ちを犯すのは人間を描いてほかにない。そして、マルクス主義者たちもしばしば誤る——未経験によつてか、無能さによつてか、あるいは独断論によつてか、または、彼らが必要な探究を行う時間ないしは手段を持ちあわさなかつただけのために。だから、彼らの《強化された独断論》は、何かがうまく行かなくなればいつでも……闘争を放棄したり、反マルクス主義者になつたり、という形をとる。この強化された独断論のお陰で、ある者がうまく行かなくなれば、他の者が歩みでてそれを正し、過ちは修正される……」(O. O. P. 95) 傍点は筆者。すぐさまレーニンの「批判と自己批判」の断片が綴られたところで、われわれは、以上の言葉のうち深く傷ついた悔恨の刻みなど読みとることはできない。過ちは人間が犯す、理論は無傷のままなのか？

マルクス主義は強化された独断論ではない、と強調したのはコンフォースであつた。その彼にしては、スターリン主義に関する記述は楚々として、物悲しさをさえ感じさせる。少なくともわたくし個人には、ポパーとともに、背負うにはあまりにも重い十字架——歴史・良心・自由の問題が大きく浮びあがつてくる。ポパー対コンフォース——*coincidentia oppositorum* は、結局は疑問符を付して終らねばならない。やはり、友は友であり、敵は敵たらざるを得ないのであろうか！

(1) ポパーの科学的客観性についての見解を要約的に示しておく、「……われわれのいわゆる《科学的客観性》とは、個々の科学者の不偏性の所産と  
いうのではなく、科学的方法の社会的ないしは公的性格の所産であると言えよう。そして、個々の科学者の不偏性は、それが存在する限り、この社会

的あるいは制度的に組織された科学の客観性の起源ではなく、むしろその結果なのである」(O. S. II, p. 220)。

(2) コーンフォースは、他の箇所においても、マルクス主義が「すべての現象を説明する」という誤解を避けて、そうしたことが基本的な科学理論を確立する主要問題ではない、と明言している(O. O. p. 25)。

(3) この言葉は、P. H. pp. 51-52 にみえるもの(2)である(O. O. p. 158)。

(4) ポパーの暴虐政治と暴力に対する批判は、そのままスターリン批判に通じるが、すでにみたように、彼の「開かれた社会とその敵たち」中のクリティアスの肖像、彼についての叙述は、スターリンと読みかえてもよいだろう(O. S. I, pp. 191-192)。

(5) 他方で、コーンフォースの態度には、妙に開き直つたところも窺える。例えば、「この点でわれわれは、ポパーがかくも賞讃を述べたてるといわれるデモクラシー政府のあるものより、遙かに《暴力的態度》をとっていない。もしも彼が今日(一九六六—六七年)、《暴力的態度》を断罪したいのなら、アメリカ大統領によつて採択されている当のものに、なによりも先ず注意を振り向けた方がよい」(O. O. p. 326)と。

## 結 語

ポーランドの哲学者L・コラコフスキーは、無論ポパーと立場を同じくするのではないが、『歴史主義の貧困』に触れながら、悄然として書いている、「社会現象を予測する有効な技術に対する希望は、そう言われた予測の諸結果へのベシミスティックな恐怖に道を譲つた。真実の予測は不可能と見なされるようになったけれども……」と。彼のこうした心境を、レオポルト・ラベッチは身に泌みて感じとり、倫理・良心・歴史の問題についての内面の闘いの鏡を写しだしている。そして、「造物主は、世俗的終末論によつて創られ、科学的歴史の名のもとに育まれた想像力の虚構となり果てた」というZ・ヨルダンの言葉を引いている。このことをよく知悉しているのはコラコフスキー自身であつて、彼の重要な論文集『責任と歴史』<sup>(4)</sup>が取りあげられたゆえんである。そのなかで、ある神父との空想的な会話がかわされている。

神父は答える。「人類の道徳的な知的な生活が経済の投資と同一の原則で操縦されるなぞとは私は決して信じないだろう。明日、

より良い成果を獲得するために今日節約する。だから、明日には真理が勝つように今日は虚偽に奉仕することができる。そして高潔のために進路を開いてやるために、今は犯罪をおかすことができる。人間がしばしば二つの悪のどちらかを選択せねばならぬことは私にもわかつている。だが、両方の可能性が相当悪いものであるときには、私は選択を差し控えるために全力をつくすであろう。こういうやり方であっても私は何かを選択しているのである——この何かとは例えば、人間が自分の置かれている状況を自分で判断する権利である。これは決してつまらぬことではない。……現実がわれわれからある決定を要求する場合、この決定は結局道徳的品格を持つていようから、人類発展のなかで形成されてきた不変の道徳的諸価値こそ、もつとも疑問の少ない手がかりである。いずれにせよ、道徳的諸価値は、あらゆる歴史哲学よりも信頼に価する。これこそ私が、最終的に私の見解にとどまる理由である。

「何が起ころうともか」

「何が起ころうともか」

右の言葉は、わたくしが「ポパー・コーンフォース問題」を論じる際、脳裡からつねに離れがたきものであつた。さらに、ニコラ・シアルモントのつぎの言葉もそうであつた。「近代的暴虐政治、およびそこにおいて知識人が果たす役割についての議論に結論をくだすには、最終的には、権威主義の原理とは何か、そして、それがどんな特殊形態としてあらわれるかを訊ねてみるとよい。最も単純な答えは、権威主義的原理というものは、社会・政治的問題に関しては、総体、全体性、部分と総体との有効な機能化の必然的かつ機械的な一致といつた観点に、自己自身を据える事実そのものに内在しているように思われる。実際に、全体へのかかわりは、人間社会がひとつの有機体——その法則は本質的に認識される——であるという観念を含み、同時に、多少の差はあれ、暴力的な外部からの干渉によつて、人間社会を上から変更できるし、実際に変更しなければならぬという観念を含んでいる」(傍点は引用者)。

暴虐政治の極にあらわれる残酷さ、わたくしは今を去る十数年前と同じようにポパーを読み返し、コーンフォースに対してはいささか焦立ちながら、この論争に誘い込まれたわけである。ポパーの合理的個人主義からみると、わたくし自身はむ



しる批判されるべき、さながら実存的相貌を帯びた思想の旅路を歩んでいるかに思われようが、実践の立場は少しも変つていない<sup>(6)</sup>。ジョン・プラメナツツは、ポパーとバークの酷似を指摘しているが、ポパー自身、『開かれた社会』のなかで、バークを批判的な合理主義者と呼んでいる(O. S. II, p. 229)ことは充分注目に価する。しかし彼は、豊麗な「実践的想像力」を具え、火焰<sup>ほむら</sup>となつて燃え上る反抗的なミリッタントであることを見誤<sup>まちが</sup>まつてはならない<sup>(9)</sup>。もはや多くを語る必要もない。ただ、先のペリクレスにもなんで、より言葉少なく、ポパーの引用を以てこの稿を閉じるのが相応しいことのように思う。

ロマン的歴史主義の榮譽の道徳は、幸にして没落しつつあるように思われる。無名戦士がそれを示している。われわれは、犠牲とはどれ程のものなのか、それが匿名でなされるときには、さらに大きなものであることを認識しはじめている。われわれの倫理教育は、それを見習わなくてはならぬ(O. S. II, p. 277)。

- (1) Leszek Kolakowski, *The Alienation of Reason: A History of Positivist Thought*, (trans. by Nobert Guterman), Garden City, New York: Doubleday and Company, 1968, p. 192.
- (2) Leopold Labedz, "Kolakowski: On Marxism and Beyond," *Encounter*, Vol. XXXII, No. 3, March, 1969, pp. 77-83.
- (3) *Ibid.*, p. 79. <sup>1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9)</sup> Z.A. Jordan, *Philosophy and Ideology: The Development of Philosophy and Marxism-Leninism*, Dordrecht-Holland, D. Reidel, 1963, p. 517. かつ引用可也。
- (4) 幸いでして、われわれはその翻訳を手にしうる。L・コロモンスキー『責任と歴史——知識人とマルクス主義』小森 深・古田耕作訳(勁草書房)。引用は同書、六八—六九頁による。
- (5) Nicola Chiaromonte, "On Modern Tyranny," *Dissent*, March-April, 1969, p. 149
- (6) 本稿においては、深く立ち入って論ずることはできないうが、わたくしは、ポパーの立場はアルベール・カミュの「反抗」の政治思想と行動とに、その発想的地平は異なるとはいえず、きわめて近似したものを認める。わたくしがカミュに関する仕事をした理由もそこにある。F・H・ウィルホイット『ニヒリズムを越えて——アルベール・カミュの政治思想——』奈良和重訳(慶応通信)とくに第IV章「イテオロギーの批判」参照。
- (7) John Plamenatz, "The Open Society and Its Enemies," in *Banbrough*, op. cit., p. 212

- (8) Gerald W. Chapman, *Edmund Burke: The Practical Imagination*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1967. 444p. ポニーとマキンスはそれぞれ「ポニー」の数冊「マキンス」の題名を著書の中で用いている。Barleigh T. Wilkins, *The Problem of Burke's Political Philosophy*, Oxford, Clarendon Press, 1967, p. 79 の脚註参照。
- (9) コーンフォースはつぎのように述べている。「真のミリッタントはつねに問題を問う。彼は《右翼》のにもせよ《左翼》のにもせよ、どんな独断をも押しつけられることを許さないだろう」(O. O. p. 126)。表現に関する限り、これはまさにポニーの立場と一致している。